

東大寺の大仏開眼に 派遣された芸能団

ベトナムと日本の文化交流は両国の歴史のかなり早い段階から行なわれており、考古学的に見れば、先史時代から原史時代まで遡ることができる。それは北東アジアと東南アジアの交流を背景としたものであった。

文字で残された史料によれば、8世紀に林邑国（チャンパ王国）の芸能団が奈良の都に派遣され、752年の東大寺の大仏開眼供養祭で舞踊を奉納したとされる。同じ8世紀には日本の知識人である阿倍仲麻呂が一時、安南都護府に居住していた。安南都護府とはすなわち大羅城（現在のハノイ）である。その安南都護府時代の遺構が最近、ベトナムの考古学的調査により、ハノイ市バーディン区にあるタンロン王城址（タンロン＝昇龍）から発見されている。

また、13世紀のモンゴル帝国・元朝の覇権拡大に対し、大越国（当時のベトナム）は3回戦って勝利し、チャンパ王国も元朝を打ち破った。この勝利

が元朝の日本侵攻計画に影響し、日本に対する3度目の侵攻を断念させることになったのである。

陶磁器に関する研究結果からは、両国の陶磁器の交流が14世紀後半から存在し、その後の数世紀間も拡大していたことがわかる。ベトナムの陶器は日本の堺、大阪、長崎など多くの都市から見つかったいて、国立の博物館や個人の収集家によって保存されている。

中世にベトナムから輸入された陶器は「交趾焼き」とか「安南焼き」と呼ばれた。日本人はこれらを模した陶器をつくり、「交趾風」「交趾焼風」と呼んでいたようである。15世紀から16世紀初めには、琉球（沖縄）が日本とベトナムや東南アジアとの交易関係で重要な橋渡しの役割を担っていた。これがベトナム人と日本人が接触した最初の経済交流であり、文化交流であった。

御朱印船の時代に 足跡を残した日本人

特に17世紀は両国関係が活発化した時期であった。当時は御朱印船の時代であり、多くの御朱印船がベトナムの

港に来訪した。日本人は、「ダンゴアイ」と呼ばれた北部のタンロン（ハノイ）やフォーヒエン（フンイエン）、「ダンチヨン」と呼ばれた中部のタインハー（フエ）、トゥーラン（ダナン）、ホイアン（クアンナム）などのようなベトナムの主要な都市や港に現れ、重要な役割を担った。

徳川幕府が鎖国令を出したあとも、日本人や日本の商品がベトナムの多くの都市で見られた。日本の陶器、特に17世紀半ば以降につくられたとみられる肥前焼きが、ハノイではチャンティエン商業センター建設の際の地中、文廟（孔子を祀った建物）、タンロン王城址内の「後楼」と呼ばれる楼閣などから見つかっており、さらにフォーヒエン、タインハー、ホイアンのような当時の主要都市の中心部だけでなく、北部山岳地帯ホアビンのムオン族の墓地や中北部タインホア省のラムソン史跡、南部ラムドン省の古墓地といった遠隔地からも見つかっている。

この時期の経済や文化面での交流は、ベトナム人と日本人がお互いに接触し理解しあう機会となり、良好な印象と

「東遊」するベトナム人、 「南遊」する日本人

越日交流の歴史と伝統

フォン フイ レー
Phon Huy Le

ベトナム歴史学会会長、越日友好協会副会長

史跡や記念となる品々が残され、それらは関係のあった一族や寺院、そして両国の人々によって今日まで保存されてきた。

ホイアンでは、日本人の墓地が地元住民によって保存され、供養されてきた。また、来遠橋、通称「寺橋」と呼ばれる橋は「日本橋」とも呼ばれている。ダナン市郊外のノンヌオック山ホアギエム（華巖）洞窟にある、1640年ごろのものと思われる「普陀山霊中佛」碑には、10人の日本人の名前が刻まれており、財産を寺院に寄進したという。なお、そのうちの5人はベトナム人の妻を娶っている。バッチャン焼きで有名なハノイ近郊の村バッチャンのゲン（阮）という一族の家系図（家譜）には、一族のうちの一人が日本人妻を娶ったと記されている。

トートムというベトナム式カルタは今でも嗜好されているが、そこに描かれている人物はすべて17世紀の日本人の服装だということを知る人は少ない。ベトナムの日本人は主に商売、その仲介、通訳、外国人用の宿屋経営などに従事し、その関係はベトナム社会の多くの階層の人々にとっても身近であり、緊密な関係であった。

ファン・ボイ・チャウと東遊運動の影響

19世紀後半、日本は明治維新を経て工業化の道を歩み、急速に強力な工業国となり、中国やロシアを打ち破った。そうした明治維新の日本のイメージは20世紀初頭のベトナムの多くの愛国の志士の誇りとなり、鑑となった。その象徴がファン・ボイ・チャウであり、東遊運動であった。ファン・ボイ・チャウは1905年から08年までの4年間に、日本に多くの留学生を派遣した。そのピークが07年で、その数は2000人に達した。留学生の多くは優秀な青年たちで、彼らはその後、ベトナムの国内外で革命運動に参加していった。そうした留学の具体的な結果に加え、東遊運動は20世紀初頭のベトナムの愛国の思想と運動に大きな影響を与えた。

ファン・ボイ・チャウは当初、立憲君主制と外国の援助の必要性を主張していたが、中国や日本滞在中に梁啓超や孫中山（孫文）、犬養毅や大隈重信などと接触し、外国の援助よりも教育への支援の必要性、立憲君主制よりも民主主義へと主張を変化させていった。ファン・ボイ・チャウの西欧民主主義

思想の受容に役立ったのが、明治期の日本の知識人の成果——西欧思想を翻訳する際につくり出された和製漢語の概念であった。それは「同文」の邦である中国・日本・ベトナムの三方国間の三方向による文化思想交流と言えろ。和製漢語の概念は、西欧民主主義思想の伝播にとって非常に重要な役割を担った。「民族」「民主」「経済」「哲学」などの語はすべて日本の知識人がつくり出した和製漢語であり、ファン・ボイ・チャウによって直接、あるいは中国の進歩的な書物を経由して間接的にベトナムにもたらされた。

東遊運動は最終的には失敗したが、ベトナムと日本の関係に大きな足跡を残した。当時、ベトナム人は、ベトナムの愛国の志士、彼らの書物や積極的な活動を通して、日本は「同種・同文」の国で自強の精神を高く掲げた国であることを理解するなど、日本の歴史や文化への理解を深めた。日本政府は、当時の諸般の事情もあり、フランスとの協定に基づき1909年、ベトナムからの留学生に対し国外退去を命じた。しかし、東遊運動はその後のベトナムの民族解放革命の歴史に大きな影響を与えた。特に日本の一部の政治家や

ファン・フィ・レー●ハティン省（中部）出身。ハノイ国家大学歴史学部教授。ベトナム歴史学会会長、越日友好協会副会長、国家文化遺産委員会副会長。著名な歴史学者の家系ファン・フィ家出身。真摯な研究姿勢と熱心な後進の育成で内外から人望を集めている。研究界における日本とベトナムの掛け橋としても長年貢献し、1996年には福岡アジア文化賞学術研究賞・国際部門を受賞



知識人との交流や友情はファン・ボイ・チャウの回想録に真摯な態度で書き留められている。特に象徴的なのはファン・ボイ・チャウと浅羽佐喜太郎医師との友情であり、ファン・ボイ・チャウと浅羽村（現・静岡県袋井市浅羽町）の住民が寄進して1918年に浅羽医師の墓のそばに建立された記念碑にはファン・ボイ・チャウの感謝の気持ちが刻まれている。

「貴方のような豪侠の方は古来未だ見ず、その多大なる義は内外を覆いつくほどであった。貴方は天のごとく施され、私は海のごとくその恩恵を受けた。私の志は未だ成らざるも、貴方は待つてくれずに逝ってしまった。この悠々たる思い、ここに永く刻む」（蒙亮王古今義巨中外公施以天我受以海我志未成公不我待悠此心其億萬載）

日本による占領と戦後の「新ベトナム人」

東遊運動のあと、第二次世界大戦として冷戦の時期は、ベトナムと日本の関係は浮き沈みのある複雑な時期であったが、二つの面から見る必要がある。

1940年から45年に日本のファシズムの軍隊がベトナムを占領し、悪行

を行なったが、その一方で、その後、数百人の日本兵がベトナムに残り、1945年から54年のベトナム人民の抗仏戦争に加わった。そのなかには、ベトナム政府から生前、あるいは死後に勳章を授与された者もあった。

ベトナムでは彼らを「新ベトナム人」と呼んだ。彼らの多くがベトナム人妻を娶り、家庭を持ち、ベトナムの社会で生活した。ベトナム人の心の中では、この「新ベトナム人」が日々の生活のなかでより身近な存在となっていくなかで、日本のファシズムの兵士というイメージは次第に薄れていった。

一方、第二次大戦中、日本との接触の必要から、ベトナム人のなかにも日本語を学ぶ者があり、それにあわせてベトナムで初めての日本語習用の教材が編纂された。また、冷戦中には、日本に留学する条件に恵まれた学生もいて、そのなかには、農学のルオン・デザイン・クア博士や医学のダン・バン・グー博士のような、のちに祖国の発展に貢献した人材となった者も多い。

全面的かつ双方向な 二国関係へ

現代においては、1973年にベト

ナムと日本が外交関係を正式に樹立して以降、二国関係は新たな発展の時期を迎えている。長きにわたる文化交流の伝統を受け継ぎながら、今日の越日二国間の友好、交流、協力の関係はあらゆる分野で発展している。

日本で学ぶベトナム人留学生の数は、2005年には1745人に達した。経済、文化、科学の分野での交流では、「東遊」するベトナム人、すなわち日本に留学するベトナム人が日々増加しているだけでなく、研究、勉強、旅行、投資などのために「南遊」する日本人、すなわちベトナムを訪れる日本人も増えている。

これまでの一部の分野や一方向的な交流から、現在の二国関係は信頼できるパートナーと長期の協力関係として、全面的かつ双方向の関係に高められている。

文化の同質性と歴史に培われた相互理解を基礎に、ベトナムと日本の関係はそうした貴重な財産を維持、発揮し、歴史の限界を克服し、乗り越えてきた。そして、両国の利益と潜在力、さらには国際交流という時代の流れがあった相応しい関係に高まりつつある。

（原文はベトナム語、翻訳・今村宣勝）